



「情報化社会」と申しますが、「情報」とは「情を報ずること」。「情」とは本来、人間の感情とか感覚に当るもの。だから数字とか統計とかデータというのは、むしろ情報の下位に属するもので、本当の情報というのは、人間の心の中の感情をきちっと把握して、それを伝えることだと思う。

伝えると言えば「宗教」というのは、明治以後ずっとないがしろにされ、あるいは触れてはまずいとされてきた分野なのではないかと思う。ここ数年、「国際化」という言葉を耳にしない年がないくらいに叫ばれ続けている。しかし本当の国際化というのは英語ができるとかパソコンができるとかではなくて、自分はどういう信仰を持っているのかという、アイデンティティー（個性）の確立にあるのではなからうかと思う。

昨年「ラストサムライ」という映画が放映されて、日本のみならず、世界に日本の文化の一端を知らしめる結果となった。そこで新渡戸稲造の「武士道」を読んでみると、明治

期にあたり、日本には宗教的なバックグラウンドが無いから、それに代るものとして、欧米人に日本人の精神性を紹介する為に、武士道について述べたと書いてある。つまり江戸時代には既に宗教的倫理とか道徳といったものが希薄になっていった為、代わりに武士の間で習俗として行われてきたことを整理して、日本人の誇るべき精神規範として「武士道」と世界に発信したわけなのだ。ではなぜ日本で宗教というものが希薄になってしまったのか？考えるにこの国には、国土は狭いが気候や地理条件に恵まれ、山の幸・海の幸など、物質的には非常に豊だった。また時には圧政もあつたが、鎖国政策により外敵に襲われることもなく、比較的平穏な時代を過してきた歴史がある。だから神仏を強く求める必要もなかったのではなからうかと思う。

いま全国に小中学校の数が約2万5千、コンビニが約4万店あるといわれている。これに対してお寺の数は、宗教学者として登録されて、ちゃんと活動しているところだけで7万4千もあるそうなのだ。それだけのお寺がとらええず廃寺にならずに現存しているという事は、物心両面でそれを支えている人がいるということ。この小さな国土に七万四千もお寺が存在している国は、世界中どこを探しても他に類をみない。それを考えると、これはもう

宗教というより習俗ではないかという気がする。お正月に成田山に初詣に行く人達の数が190万人といわれる。ドイツニーランドの来客数が約62万人だそうだから、日本中の神社仏閣を訪れる人の数は、ドイツニーランドなんか比較にならない。

ドイツニーランドは世界的にも有名で、嫌いな人の方が少ないのではないか？しかしそれよりもお寺や神社に足を向ける人が比べものにならないくらい多いというのは、真成寺に行けば、お金では買う事ができない「心の平安」というものを、得られるからなのではないかと思う。

例えばですよ、仏教には『無財の七施』と言って、7種類の布施の形が示されている。この7つの布施にはお金は勿論、時間も何もいらぬ。ただあるのは、自分の真心のみ。その心が1つあれば、相手を幸せな気持ちにさせることが出来るという布施のこと。

例えばその一つ「眼施（がんせ）」とは、優しい眼差しでもって、相手をジッと見つめてあげるだけ。次に「和顔施（わがんせ）」とは、通りすがりにニコリ笑って、相手の気持ちの心を春風が吹いたような気持ちにしてあげることだって大きな布施なのです。

その様な仏様が説かれた宗教、仏様の教えとは紛れもなく、私達日本

の文化であり、アイデンティティー（個性）に他ならないのではないか。武士道でも間違いないが、古来私達日本人が心の中に備えている本当の文化とは、こういう他人の事を思いやることができる大いなる気持ちを備えた生活の事ではないか。今1度、自らの生活を振り返ってみたいものである。

合掌

副住職 谷川 寛敬

